

水戸学と尊王攘夷

大津 隆文

春四月、中学時代の仲間三人で伊豆へ旅行した。泊まりは下田、日本開国の歴史的舞台だ。吉田松陰が密航を企てたのもここ下田だった。もし松陰の密航が成功していたら、彼の思想にどんな影響が生じ、明治を築いた彼の教え子達の行動に、どんな変化があっただろうか。そんな歴史のイフが心に浮かんだりした。

最近読んだ松崎哲之著『水戸学事始』は大変興味深く、以下はその受け売りである。

尊王攘夷思想は水戸学によって確立され、松陰も脱藩して水戸を訪れ、水戸学の影響を強く受けていた。幕末史は尊王攘夷論抜きには語れない。

尊王攘夷は当初中国北宋の『春秋伝』等において成立した思想で、武力で抜きん出た覇者が、諸侯に君臨し天下を治める資格があるのは、正統な王室（周）を尊び夷狄を排除した場合、つまり尊王と攘夷が覇者の条件であった。

水戸光圀の『大日本史』では、徳川家康は覇者と位置付けられて、徳川將軍の下諸大名が一致団結し、天皇を尊び、外国の脅威から日本を守っていこうというのが元来の尊王攘夷であった。

ところが幕末開国に踏み切った幕府は、攘夷を実行できなかったため統治者としての資格を失ったと、尊王攘夷が倒幕の政治的スローガンとなる。薩摩も長州も武力による攘夷が不可能なことは自ら体験していたが。

一方將軍であった徳川慶喜は、幼少時から水戸学に親しみ尊王精神が染み込んでいたため、「錦旗」を前に戦意喪失、ひたすら恭順の態度をとる。

幕末から明治へかけての一瞬の油断も許されない厳しい国際情勢。その中でよく独立を保ち得たのは、先人達の大局観と賢明な外交のお蔭であった。維新後の新政府は開国により近代化を進め、不平等条約という軛から脱することも出来た。いわば近代化による平和的な攘夷の成功である。

以後、尊王は皇国史観に発展し、攘夷で国を守るための軍隊は、統帥権独立の名の下にシビリアンコントロールを拒絶し、国を滅ぼすに至る。終戦で尊王攘夷の呪縛を脱したといえようか。